

お浄土のしおり 善導寺寺報 季刊八号

秋号
平成二十八年
九月一日

後篇 第1 難易二道 なんいにとう) 浄土宗略抄

浄土門(むようどもん)というは、この娑婆世界(しゃはせかい)をいといて、いそぎて極楽(ごくらく)にうまるる也(なり)。

かの国(くに)にうまるる事(こと)は、阿弥陀佛(あみだぶつ)のちかいて、人(ひと)の善悪(ぜんあく)をえらばず、ただほとけのちかいをたのみ、たのまざるによる也(なり)。このゆえに道綽(ぢやく)は、浄土(むようど)の一門(いちもん)のみありて通入(つうにゆう)すべきみちなりとのたまえり。

されば、このころ生死(むようじ)をはなれんと思(おも)わん人は、証(むよう)しがたき聖道(むようどう)をすて、ゆきやすき浄土(むようど)をねがうべき也(なり)。

この聖道(むようどう)・浄土(むようど)をば、難行道(なんぎようどう)・易行道(ひぎようどう)となづけたり。

たとえをとりてこれをいうに、難行道(なんぎようどう)は、けわしきみちを、かちにてゆくがごとし。易行道(ひぎようどう)は、海路(かい

ろ)をふねにのりてゆくがごとしといえり。

あしなえ、目(め)しいたらん人は、かかみちにはむかうべからず。

ただふねにのりてのみ、むかひのきしにはつくなり。

しかるにころころのわれらは、智慧(ちえ)のまなこしい、行法(ぎようぼう)のあしなえたるもがら也(なり)。

聖道難行(むようどうなんぎよう)のけわしきみちには、惣(そう)じてのぞみをたつべし。

ただ弥陀(みだ)の本願(ほんがん)のふねにのりて生死(むようじ)のうみをわたり、極楽(ごくらく)のきしにつくべき也(なり)。

仏教(お釈迦様の教え、仏陀の教え)の目的は、生死(むようじ)の苦しみの連

鎖(くわ)を無くして、それを克服する、**「という、本物の幸福への道」**です。

それには大きくわけると二種類の道が説かれ、これ以外にはありません、となります。

その二種類の道が、

聖道門(むようどうもん)「さとりを目指す道

と

浄土門(むようどもん)「救いにあずかる道

である、と説かれます。

さとりを目指す道にはたくさんありますが、要するに、戒律をまもり修行をし、それによつて自らの心に智慧を開発して、悟りを得る、乃ち、お釈迦様のように、仏陀となる、という道で、この一生のうちに、この結果を得るのは、先ず無理です。お釈迦様でさへ、**「三阿僧祇劫」**もの長い間の生死を経て、たくさんの仏様に出会い、教えを記紀、修行・善業を積んで、その結果、二千五百年前に、インドの菩提樹の下で、お悟りを開かれたのですから。私達のような、平凡な人間には、そのような道は、総じて**「のぞみをたつべし」**と、法然上人はおっしゃっています。この道は孤独の道でもあり、つらい道



挿絵 浄土の弥陀

でもあり、とても難しい道です。南方の上座部仏教や、日本の浄土宗系以外の「真言宗」「天台宗」「華嚴宗」「禪宗」「日蓮宗」それぞれの教えは、この路線上で、得た功德が絶対に減ることなく、悟りへの道を退かない境地「これを不退転の境地」といいます」を目指するのが一応の目標であり、そのための行為が説かれています。どれも尊いすぐれた教えですが、それを実行する人の能力により、何時その境地になるかは分かりません。ですから、それぞれ(上座部仏教や日蓮宗系をのぞいて)の宗では、一生のうちに、それぞれの宗に説かれた境地を悟る事が出来ない人のために、かたわらに、浄土に生まれる方法」が説かれているくらいです。

大蔵経」といわれる、日本に伝わったお釈迦様のお説きになった経典を出来る限り全て集めた仏教経典集がありますが、巻物にして五千巻余りの分量のものを、法然上人は、お念仏による浄土往生が、み仏の大慈悲のお力によって誰の身の上にも実現するという道理を、発見なさるまでに、五千余巻の「大蔵経」を、実に「七回」精読されたというかたです。日本のお坊様の中で、このような伝わりが有る方は、法然上人をおいて、他にはいらっしゃいません。承安五年春、上人四十三歳の時に、この「浄土への門」をお悟りになられました。その後も、この「念仏往生」の道理の間違いないことを検証確認をくりかえし成されながら、ご一生をかけて経典をひもとかれておられましたので、ご一生にどれほどお経に取り組みされたのか、想像もつきません。



京都右京区 退蔵院の庭

その、極楽浄土に往生する道は、その他の道が、わたしたちの心を攪乱する「煩惱」をのこりなく絶つて、悟り」に至る「自力の道」であるに対して、極楽浄土に往生する道は、自身の煩惱はそのままに、阿弥陀仏の極楽に迎いとろうとするお力を頼んで、自然に極楽に生まれさせて頂く道こそが、もつともわたしたちのような能力の劣る者には身の丈にあった、しかも勝れた結果である「不退転の境地」になる、万人に開かれた道であると言われているものです。

法然上人のお言葉にこのようなお言葉があります。

欲界散地にうまれたる物は、みな散心あり。
たとえば人界の生をうけたる物の、目鼻のあるがごとし。
散心をすてて往生せんといわん事、そのことわりしかるべからず。
散心ながら念仏申す物が往生すればこそ、めでたき本願にてはあれ。

(現代語訳)

欲望の渦巻く迷いの世界に生まれた者は、誰もが散り乱れる心を持っています。たとえて言えば、人間界に生を享けた者には生まれつき目鼻がついているようなものです。ですから、その散り乱れた心を捨ててこそ往生は叶うのだと主張する人がいますが、そうした道理などまったくの見当違いです。散り乱れた心のままにお念仏を称える者が往生するからこそ、すばらしい本願なのです。

このお言葉をいただいて、我が身をせめることなく、よろこび希望をもちながら、臨終の夕べに極楽世界に生まれる子とを願って、日々お念仏を続けましょう。

本堂のご本尊像は、

いよいよ修復方針が決まりました!!

皆様、長らくご懸念をおかけしておりました、本堂ご本尊の修復の方針が決まり、順調について、来年三月頃、当寺にもどってくる予定となりました。

今までの経過から、申し上げます。

平成26年度、尊像修復にとりかかる段になり、修復師に見て頂いたところ、尊像の姿・様式が、平安期にさかのぼる可能性があることが分かり、あわせて像表面にはわずかに箔の剥離と相当範囲に変色等があり、何より新造の年代を明らかにする必要がある、という事になりました。

平成26年末に「搬遣式」をとり行い、阿弥陀如来の法身に神鏡に遷葬して頂きました。(現在皆さんが拝まれているのが、本堂中央の「浄土曼陀羅」と浄神鏡です。)

「搬遣式」執行の後、京都仏師の工房に預け、支障のない規模の財の

小片を取り、現代科学による「炭素同位体による年代測定」法に委ね、その結果が去年（平成27年）10月初旬に確定しました。

年代測定の結果によると、尊像に使われている木材の「伐採年」は、おおよそ「平安時代中期から鎌倉時代前期」の結果となりました。（材のなるべく外側なほど正確に分かるので相当の誤差があります。）

当初、当寺、善導寺「本堂」ご本尊の像は、戦国時代の由良国繁侯（新田の庄領主）の発願によつて「再造」された、とある文献（檀林館林善導寺誌「撰門編」）により、徳川時代に入る少し前、天正十八年の造立と想像されておりました。つまり、それまでも、「ご本尊像」はあったけれども、この時に全く新しい木材で「再造」されたのでは、という想像であったものです。しかし大きく認識があらたまり、文化財にも並ぶ古像であることが、このたび分かりました。

当寺は、和銅元（701）年、行基菩薩によつて開創されました。当然その時から、仰がれていた「ご本尊像」があったわけですが、最初は、行基作「観世音菩薩像」であつたようです。（寺内に現存しています。）

その後、建治二年（1276）10月、浄土宗4祖寂恵良暁上人により同地に尊修念仏の道場を再興のため伽藍が建立され、初めて「終南山見性院善導寺」と呼称されました。恐らくこの時に、造立されたであろう「阿弥陀さまのお像」が、現在まで護持されてきた御本尊像であり、この御像が、天正18年に、修補されたようなかたちで「再造」された、と解釈することが出来ます。

尊像に使われている木材の「伐採年」が、平安時代中期から鎌倉時代前期であり、通常、伐採された木材は、仏像の材として使用されるのに長くて50年程、乾燥等の為に寝かしておくという例が多いとのことです。

これほどの古像になりますと、文化財指定にも匹敵する像なので、なるべく下地の漆まではそのままにして、箔の層の修復に止めるのが基礎的な直しの考え方になるそうです。

当初は、「東日本大震災」の時の揺れにより、尊像の台座の一部が損傷し、そこだけ修復するにも、寄せ木造りの像の台座は、謂わば「下ナツツ状」に種々の形に掘り出した部品を下からくみ上げている構造なので、すべて台座のくみ上げをほどいてから修復する事が必要です。

あわせて、全体的に、金箔押の状態が部分的に浮き上がり、又、純度の低い箔が押されている部分があり（以前の数回の修復時のときのもののように）、その部分だけ金色の度合いが変わっている事も分かり、そのままに放つておくと、面影が劣化されてゆくばかりなので、今後末永く状態を維持するには、部分的に同じ純度に箔押をし直し、あわせて、鎌倉期の仏像の特徴である「切金模様（衣服部分に施されるうすい文様）」の痕跡も発見されたため、当初のお像の姿の復元も兼ね、しかも「新造」されたようには見えない様に全体の表面を修復する、という方針となりました。

このような修復方針のもと、現在京都修復所にて、鋭意、作業に入つていただいている所でございます。

従つて、作業が完了して当寺に遷座されるのが、来年（平成29年）3月以降という予定になりました。

当寺にとりましても、檀徒の各位にとりましても極めて歴史的な事となります。わたくしも、微力ながら、皆様のお気持ちのお力添えを陰に頂きながら、往古の精神文化の顕彰と後代への継承に心をかけ、一層の精進をさせていただきますと思つております。

修復費用については、既に寺院法人の基本財産の部より、支弁可能ですが、総代の方々からも、このたびの修復により大きなご縁を結ばせて頂くためにも、応分のご喜捨を致したいとお声がございます。

善業を積ませて頂く為に、檀信徒の皆様にも、応分のご喜捨をお勧めする次第となりました。

この経済環境ですので、一口千円単位で、皆様、何口でも結構でございますので、後日別送の勧進要項に基づいて、ご功德を増進されますように、応分のご喜捨をお勧めする次第でございます。くわしくは、別便要項をご覧下さい。

終南山 善導寺 七十八世 念誓侯雄 拝

